

2006年度 東京蜘蛛談話会 11月例会

1. 日時 2006年11月26日(日) 10時より(開場9時30分)
2. 場所 東京環境工科専門学校 〒150-0011 東京都渋谷区東 2-5-3
 「JR 渋谷駅」東口(東急文化会館側)より、「学 03 日赤医療センター行」バスにて約5分、「國學院大學前」下車、徒歩1分、170円
3. 連絡 当日は、東京環境工科専門学校の電話が使用できないので、緊急時には以下に連絡ください。加藤輝代子 090-7012-6458 初芝伸吾 090-6156-8378
4. その他 プロジェクター、OHP 等用意いたします。
5. 同封のはがきで、氏名、連絡先、出欠、講演の有無、講演ありの場合には演題と使用希望機材(スライド、OHP、コンピュータ)をお知らせください。また、近況をお知らせいただくと幸いです。また、はがき以外の手段で下記にご連絡いただいてもけっこうです。

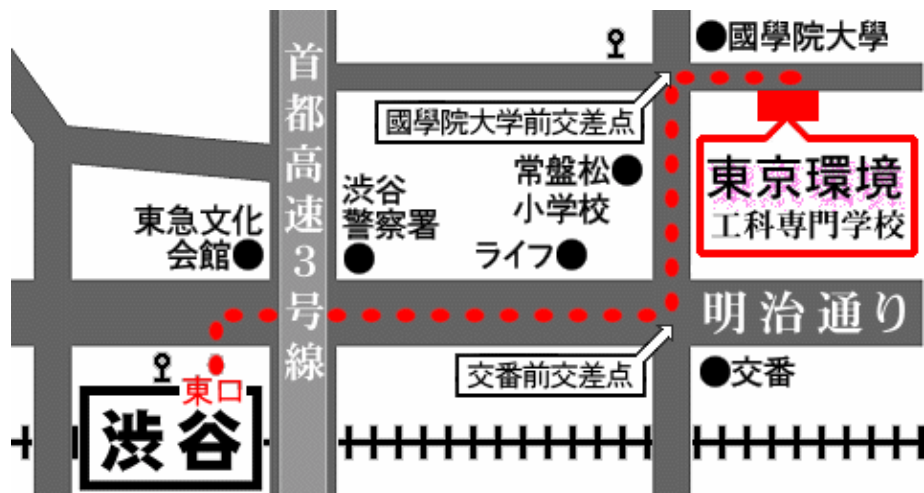
〒186-0002 東京都国立市東 3-11-18-203 有限会社エコシス
 初芝伸吾

mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.jp

Tel : 042-501-2651 Fax:042-501-2652

渋谷駅東口から徒歩15分です。坂道がありますので、バスを利用した方がよろしいかと思えます。

東京環境工科専門学校及びその周辺には駐車場ありません。



2006 年度採集観察会

1. 期 日： 第 3 回 10 月 15 日（日） 第 4 回 2 月 18 日（日）
2. 場 所： 片倉城跡公園（東京都八王子市）
3. 集 合： J R 横浜線片倉駅改札口 10 時 30 分
または公園入口（管理事務所付近）に 10 時 40 分
4. 世話人： 木村知之

京王線を利用される方は、京王片倉駅から公園まで国道 16 号沿いに歩いて 5 分程度です。

島根合宿に参加して

池田 勇介

一週間前から全国的にずーっと雨、「ほんまに大丈夫やろな？島根」そんな気持ちで東京蜘蛛談話会島根合宿は始まりました。

7 月 21 日曇。

大阪から電車でゆられて 8 時間、温泉津駅につきました。駅に着くとすぐに初芝先生に会いました。宿泊先の輝雲荘まで送っていただきました。初芝先生どうもありがとうございました。宿に着くと、さっそく蜘蛛採りに行きました。宿の前にお寺があったのでそこ



宝殿ヶ鼻のイソコモリグモ

で採集をしました。生まれてはじめて採ったユアギグモの一種と今回の合宿で目標にしていたクモの一つヒバヤミサラグモのメス成体を採集しました。

夕食では運よく今回の合宿で会ってみたい先生 No.1 の貞元先生のとりに座ることが出来ました。ついつい話しに夢中になり夕食の会場に新海先生と貞元先生とぼくだけになっていました。近似種の同定法や、ワクドツキグモが大阪で採集されたことなどを教えていただきました。

夜間採集は宝殿ヶ鼻という浜辺で行われました。海浜植物帯がわずかにあり、いか

にも「イソコモリグモがいそうだなーと思っている」といきなり初芝先生が「いた！」と叫びました。ぼくはイソコモリグモを標本と写真でしか見たことがなかったので、急いで初芝先生のもとに行きました。そこにはゴミムシの一種をくわえたメスの成体がありました。とてもかわいくてカッコよかったです。ぼくもメス幼体 1 個体とオス幼体 3 個体を採集しました。夜間観察が終わると、ぼくもひそかに楽しみにしていた宴会が始まりました。けれども今回は、あまり学術的な話ではなく谷川先生が酔ってしまいとんでもないことになっていました。

7月22日曇。

朝の観察場所は五十猛のはずだったのですが、谷川先生がまちがってしまい別の場所に来てしまったので、ここで採集・観察をすることになりました。田んぼの周辺でオオセンショウグモ、ススキの葉にいたシロオビトリノフンダマシ、お父さんのピーティングでヒカワフクログモが採れました。更に奥へ進むと貞元先生がピーティングをしていました。そこに新海先生が来て「貞元さんが取ったならここにはクモはいないなあ」と言ったので、ぼくたちも元の道を下り、お寺の手前の小さな沼地へ行きました。ぼくより背の高い草がたくさん生えていたので、とてもけわしく入りにくかったです。中に入ると至る所にシロオビトリノフンダマシがいました。沼地の上には民家や納屋がありました。納屋の裏に少し草が生えていたので見ていると何やら赤いテントウムシのようなものがくっついていました。手に探ると「オオッ アカイロトリノフンダマシやないか！」と叫んでしまいました。集合時間が迫ってきたので、沼地の先へ戻ると沼地の奥のほうで何かが、がさがさ動いていました。何かへと見に行くと水の中になんと「ピーター・ラディン・・・」。(ごめんなさい!)。八幡先生がいました。「もうマムシを3匹見たからここへは来ないでね」と言われました。

次の観察場所は矢滝。とても涼しく湿気の多いところでした。「ナミハグモが、いそうだなー」と思いながらも、スリーピングばかりしてしまいます。シフティングがしたいの



ミナミオダカグモ

にと思いながらも、「あんな所にはこんなものが・・・」とあちこちを見てスリーピングをしてしまいます。お父さんが「はっぱにトリフンばい影があるけど。」と言ったのでスリーピングしてみると、またまたアカイロトリノフンダマシが出てしまったので、結局スリーピングのエンジンに火がついてしまい、最後までスリーピングをしていました。クモ合わせをした後、自由参加で五十猛へ採集に行くというので、ぼくはもちろん参加することにしました。先に帰る人は車に乗って帰りました。ぼくた

ちも五十猛へ出発！・・・誰か足りない、ん～誰だ？・・・そうだ八幡先生だ！気づいてから五分ほどすると斜面の上のほうの笹が、ガサガサそして、あ、テロリストだ！（ごめんなさい ごめんなさい）八幡先生もそろったので五十猛へ行くことにしました。

五十猛はわりと開放感のある場所でした。ここで一番驚いたのは、高さ 1m50cm ほどの木をお父さんにビーティングしてもらおうとダニグモが落ちてきたことでした。クモを採っているとお父さんが「これ何？」とクモを持ってきたので見てみると、なんと、ミナミオダカグモ（メス 1）（オス 1）とシモフリヒメグモ（メス y 1）でした。「どこで採ったの!？」と聞くと採集した場所へ連れて行ってくれました。そして、そこでビーティングをすると今度はオビジガバチグモ（メス 1）が落ちてきました。ルーペでエビジナムを確認すると加村先生の論文の図とぴったり一致しました。とても面白い場所でした。

宿に帰ってきてご飯を食べた後、夜間観察へ行きました。観恵寺というお寺の近くで行われました。またもやお父さんに先を越され、キンヨウグモとヤギヌマフログモを採集されてしまいました。僕はリターを眺めていると、たくさんの水平円網があるのに気がつききました。なんだろうと思いきも採ってみるとどうもカラカラグモの仲間のようです。その他にはヒゲナガヤリグモを採りました。合宿が終わってから谷川先生にこの場所で取れたコアシダカグモはトライコアシダカグモだと教えられてとても驚きました。僕は *Sinopoda* が細分されたことを知ってからコアシダカグモ以外の *Sinopoda* を探していますが、見つけたことはありません。僕が取った島根で採った *Sinopoda* は、まだ幼体でした。とても後悔しています。

この後はもちろん宿に戻って宴会です。今回は学術的な話で、キシノウエトタテグモ、キムラグモや、論文についてなどとても面白かったです。

7月23日 曇

朝の観察場所は昨日と同じ五十猛です。今度は、お父さんよりもすごいクモを採ってやるぞ！という意気込みで行きましたが、結局お父さんに卵のうを抱えているヨツコブヒメグモを見つけられてしまいました。僕は、フログモの一種ばかり採っていました。そして本合宿最後の観察場所は出雲大社でした。ここでは、クモ採りというよりも観光？をしていました。ちよくちよくクモを採りながらぶらぶらしていると谷川先生が「あっちにワスレナグモがいるよ。」と教えてくれました。ワスレナグモの巣を観察していると集合時間になってしまいました。この後谷川先生に空港まで送ってもらいました。とても楽しい合宿でした。ありがとうございました。



ヨツコブヒメグモ

クモが出てくる子どもの本情報 (2)

最近出版された絵本と読みもの各 1 点の紹介

萩野康則

相変わらずクモが登場する児童書が次々に出ているようである。今回はごく最近出版された子ども向け絵本 1 点と読みもの 1 点を紹介させて頂く。

いとう ひろし (作・絵) いとうひろしの本 11 「くものニイド」

B4 変型判/32pp. ポプラ社 2006 年 7 月発行 ISBN4-591-09323-9 税込 1,260 円

クモのニイドは網張り名人である。何でも捕らえられる網を張ることができて、カブトムシはおるか、ジェット機や空飛ぶ円盤まで捕まえてしまう。しかしそのニイドにも「風」は捕ることができなかった。けれどもニイドは研究を重ね、とうとう「風」をも逃さない網を張ることに成功した。意気揚々と「風」を捕らえたニイドの運命はいかに、そしてニイドはいま、どこで何をしているのか？という絵本である。



この本に登場するクモは、8 本の脚が全て腹部から生えていて、パッチリした目が 2 つある。そして腹部腹面には体節まである。本書に限らず童話絵本に登場するクモは、

このようにしばしば現実の姿から相当かけ離れた姿をしている。作者が実物のクモを良く見ないで描いたためなのか、童話向けにデフォルメした結果そうなったのか、私には判らない。しかし、たいていの絵本では体色は地味な色彩に描かれることが多く、この点だけは実際に近い。世間一般のクモに対する印象が地味で冷淡であることの現れなのかもしれない。それに対して本書では、体色が黄色で腹部背面の模様と爪先が紫色と、実に明るく、派手に描かれている。どうせ似ていないなら、このくらい羽目を外してもらった方がかえって気持ちが良い。これなら子どもがクモに親しみを持ってくれるかも知れない。判が大きく、コントラストもはっきりしているので、読み聞かせにも向いていると思う。

作者のいとうひろしさんは、絵本・児童書の作者、挿画家、翻訳家として活躍されている方である。絵本にっぽん賞、日本児童文芸家協会新人賞、路傍の石幼年文学賞、講談社出版文化賞など、受賞歴も豊富で、おそらく現在の日本で、もっとも活発に児童書の創作に携わっておられる方のお一人である。きわめて多作であるが、それらの作品に一貫しているのが力の抜けた線と柔らかなタッチの絵、節度をわきまえた上品なユーモア、そし

て読み終わったときに何ともいえず幸せになってしまうほのぼのとしたストーリーである。どぎつさが無く安心して子どもに与えられ、そして大人が読んでも面白い、そんな良質な児童書を提供して下さるのがいとうひろしさんである。

とは言うものの、私は実はこの本に出会うまで、いとうひろしさんという方を知らなかった。より正確には、いとうさんの絵本はいくつか知っていたが、それがいとうさんの作品だということ意識していなかった。そして正直なところ、この本を最初読んだときの印象もあまり良くなかった。ストーリーがメルヘンなのか、ナンセンスなのか、ちょっとつかみどころがなかったし、おやしギャグ的なオチも今一つであった。ところが、作者の他の作品に触れ、「いとうひろしワールド」を味わってから再び本書を手にとると、違和感なくすんなりと受け入れられたのだ。もし、この本を読んで詰まらなと感じられたら、ぜひ作者の他書を読んでから再読して頂きたい。印象が変わること請け合いです。個人的には「ルラルさん」シリーズ（ほるぷ出版・ポプラ社から再発行）の「ルラルさんのにわ」「ルラルさんのじてんしゃ」や、「おさる」シリーズ（講談社）の「おさるのまいにち」「おさるとおうさま」あたりがオススメである。

因みにこの作者は「くもくん」（ポプラ社）という本も出しているが、こちらは空の「雲」の本である。

あきもとのぼる（作）・あきもと ふみこ（画）「テツガクするクモ」

A4判/112pp. 新風舎 2006年8月発行 ISBN4-289-00880-1 本体1,400円



8月末の蜘蛛学会大会時の文献コーナーでも販売されていたので、実物をご覧になり、また購入された方もおられると思う。タイトル作の「テツガクするクモ」と「トリノフンダマシの夏」の二話が収録された、小学校中学年以上向けの読みものである。

作者のあきもとのぼる（秋元昇）さんは大学で哲学と教育学を学ばれた方で、元都立高校教員である。当会会員なので、ご存知の方もおいでだろう（会歴が浅い私は残念ながら面識が無い）。環境保護運動に関わる中でクモの面白さに魅せられ、教職在職中は各赴任校でクモを研究するクラブを立ち上げて、嫌われ者のクモに対する偏見の除去にご尽力された。

絵のあきもとふみこ（秋元ふみ子）さんはのぼるさんの実姉で、本業はガーデンデザイナーである。数は多くないが、要所要所に効果的な

挿画を描かれている。カラー印刷のカバーから判断すると、ペンと水彩で描かれているようであるが、庭の草木や花の配置を手掛けられる商売柄か、色使いが大変きれいである。そのせっかくの絵が、本文中では白黒になってしまっているのが惜しい。

「テツガクするクモ」はカバキコマチグモの子グモ一匹のモノローグという形式で、生と死という重い問題を考えさせる内容である。ときおり頭の中に響く変な声が（大きくなって、本当にいいのかい？）（「死ぬ」ってどういうこと？）（いのちはどこから来たの？）と問いかける。その問いかけにたじろぎ、戸惑いながら子グモが「テツガク」に目覚めるまでを、誕生から脱皮をし、母グモの体を食べ、バルーニングで飛び立つまでの過程を通して描いている。帯に斎藤慎一郎さんの「地球のかたすみにはじめてうまれた、本格的な『クモの文学』世界へようこそ」という推薦の言葉があるとおり、確かに今までなかったタイプのクモの読みものである。

私の固くなってしまった頭は、小学校中学年にはちょっと難しくないかな、と心配してしまうが、柔らかい頭を持った子どもたちは案外サラッと、違和感無く読んでしまうのかもしれない。

「団居」や「脱皮」等、二三の判りづらい事項については、欄外に説明が書き加えられていて、親切である。欲を言えば最後に子グモが空に飛び立つところが判りづらいと思うので、バルーニングについての説明もあった方が良かったと思う。

「トリノフダマシの夏」はトリノフダマシ類が4種も生息していた谷戸（地域によっては「谷津」「谷地」ともいう）の草原が、ある夏に整地されて公園になってしまい、クモもいなくなってしまった、という開発と環境保護の問題を扱った社会派作品である。と同時に、子ども向けの研究方法の案内にもなっている。研究を進めていく子どもを主人公とした、同様のタイプの手引き書の先例としては、常木勝次先生の名著「クモの生活」（千代田書房、1967）があるが、同書ほど教育的効果を前面に押し出していない分、子どもたちに受け入れられやすいかも知れない。

ススキの葉裏にトリノフダマシを発見する様子が実に生き生きとしているのは、著者が実際に採集したことがあるからだろう。そして、開発が進んでいく過程の記述が実にリアルなので、思わず「場所はどこなんだ？」と詮索したくなる。このことを、作品の印象を著者にお知らせする手紙に書き添えたところ、期せずして丁寧な「回答」を頂いた。曰く、今から25年近く前に、都下の某市で雑木林が運動公園になる計画が持ち上がり、その反対運動に立ち上がった著者の経験を踏まえた作品であるとの由。やはり実話に基づいた物語であり、作中に登場する「斎藤さん」も実名なのである。当時、新聞にも随分と取り上げられたようなので、どこの話が察しのつく方もおられるかも知れない。

草原が無くなる前にトリノフダマシを捜そうとする主人公の少年の焦燥感と、淡々と進む工事のコントラストが白黒映画を見るようで印象的である。また、結末も深作欣二監督の往年のTV刑事ドラマ「Gメン'75」のような割り切れない終わり方であり、取って付けたようなハッピーエンドではないところが私は好きである。

渡名喜島日記

谷川明男

渡名喜島からはトナキトタゲモが記載されているが、キムラグモは未発見である。トタテがいるのだからキムラがいても不思議はない。ほんとうにいないのかどうか自分の目で確かめてみたい。また、渡名喜島からのクモの記録はわずかに4種のみである。少しでも多くの記録を残しておきたいものである。

2006年6月15日

那覇泊港8時半発の久米商船のフェリー、ニューくめしまで渡名喜島へ渡った。この島にはレンタカーはないので、完全に徒歩で行動しなくてはならない。宿に入って驚いたのは、禁酒禁煙と言う貼札であった。禁煙ルームというのはけっこういろいろなところにあるようだが、禁酒というのは初めてだ。そして、クーラーはコインクーラーであった。西表のうえはら館が無料クーラーになり、絶滅したものと思っていたがまだ生存していた。こんなこととは思いもしなかったので100円玉はわずかしかない。まあ気温は低めなので大丈夫だろう。さて、まずは島の北側と南側にある山の下見に行った。南北にある二つの山は、船上からは深い緑に覆われて見え、なかなかいいなあと思ったのだが、実際に行ってみると緑の主体は森ではなく、草本類やソテツ、アダンなどであった。背の高い木は谷筋だけに見られ、ほぼアクセスはできなそうだ。あまりクモ相には期待はできなそうだ。



部屋の入り口の貼札

集落内では、沖縄らしくチブサトゲグモとヘリジロオニグモが優占している。海岸はトゲゴミグモ、草地にはチュウガタシロカネグモとホシスジオニグモが多い。北側の山から見ると、南側の山の中腹にダムのようなものが見える。沢があるのかと思って行ってみたが、四方をコンクリートで固められた貯水池であった。南側の山の裏を周回道路が走っているので、そちらへ回ることにした。道路の起点には渡名喜林道と書いてあった。森がなくても山に入る道は林

東京蜘蛛談話会の会費は、一般 3800 円、学生 2000 円です。

郵便振替口座 00170-8-74885 東京蜘蛛談話会へお願いします。

会計担当：安田明雄 231-0861 横浜市中区元町 5-219 (TEL : 045-641-0763)

E-mail : kobato@gol.com

道と呼ぶのであろうか．途中，水が流れていたのは道路の側溝だけであった．オオハシリの生息環境はないようである．南側の山は，まるで秋吉台のように，低い植生からたくさんの石灰岩がのぞいており，頂上は鋭く尖っている．生えているのがソテツなどでなければ，まるで高山の頂上付近のような景観である．さて，登りはじめると道路わきの石灰岩の間に赤土の土壤が見えた．こういうところにトナキトタテグモがいるのかなあと思っ



渡名喜島南部の山

てのぞいて見ると，そこにあったのはキムラグモの巣であった．やはりいた．ただ，とても小さな幼体で，属すらもわからない．明日からは成体の発見に努めよう．帰り道では夕立のような通り雨にあった．レンタカーでないので雨をよけることはできず，かなり濡れてしまった．しかも，宿に着くと雨は上がった．

6月16日

朝は良い天気であった．久しぶりに太陽を見た．沖縄島滞在中から雨には悩まされ続けてきた．沖縄島では長く続く雨のために，土砂崩れや地盤沈下などが起きているほどである．今日は昼過ぎまでは良く晴れていた．昼過ぎから雲が広がり始め，帰り道にぱらぱらと雨が落ちてきたが，昨日のような強い雨にはならなかった．

今日は西側から渡名喜林道に上がった．途中で道端の草むらのをのぞいてみたが，たくさんのやぶ蚊が出てきてあつというまに何ヶ所かさされてしまった．渡名喜林道をしばらく上って行くと左手に大きな石灰岩の塊があり，そのへりから林内に入れそうな雰囲気になっていた．小さな涸れ沢である．やはり森は谷筋だけに限られているようだ．沢筋に入ると何頭ものスズミグモがいた．渡名喜では林内がポイントのようである．しかし，いそうろうしているのはミナミノアカイソウロウグモであり，チリイソウロウグモは見られなかった．岩がごろごろしていて，いかにもオオハシリグモがいそうである．岩を起こして探したみたかったが，佐々木さんから渡名喜にはものすごくたくさんのハブがいると脅かされていたので，安全第一にしてやめておいた．しかし，ハブよりもまいったのは猛烈な数のやぶ蚊である．キムラ掘り用の網帽子をかぶり軍手をしてしたが，なにしろ多勢に無勢である．ちょっとした隙をついて刺してくるものがある．暑くて汗をかくが，汗を拭くために網を上げるとカに襲われる．しばらく頑張ったが，耐え切れずに森を抜け出して汗を拭いた．道路に出ても追いかけてくるカもいる．また少しのぼると，もうひとつ森になっている沢があった．道路からけっこう落ち込んだところに流れが見える．ちょっとアクセスしにくいので，先へ進んでほかのポイントを探すことにした．しかし，その後は森を形

成している谷筋はなく、この林道の最高点にある東屋に着いてしまった。やはりあの沢に下りるしかない。昼食をとってから第二の沢まで再び降りていった。やぶ蚊対策に網帽子をかぶり、軍手をはめて、隙間になると思われる場所には虫除けスプレーをかけて林内へ突入した。入ってすぐにキムラの中くらいの巣が見つかった。まだ幼体のようなのだが昨日のものよりは大きい。と、気がついてみるとやぶ蚊がいない。隣の沢とは大違いだ。続いて倒木の根元に大きなとぶたを発見した。掘上げてみるとトナキトタテグモであった。その倒木の根元にはいくつものトタテグモの巣があった。ハブに気をつけながら沢筋に降りると、そのへりにたくさんのキムラグモがいた。じっくりとながめ、大きめの個体を採集したが、けっこう大きなとぶたからは雄の幼体が出てくるが多かった。また、蓋をあけて待っているとキムラグモは入り口の様子を見に出てくる。九州のキムラグモはねこじゃらしを突っ込むとそれに噛み付きながら出てくるというが、沖縄のキムラは出てこない。しかし、先日琉球大学の学生、小野君が、ふたを開けておくと出てくることに気がついた。渡名喜でも試してみるとやはり出てくる。しかし、出てきたキムラグモの退路を断つのに失敗してしまうことが多くやはり掘り取ることが多かった。この沢にもオオハシリグモがいそうな雰囲気がある。今日はキムラグモの標本の整理があるので、明日の夜に探してみよう。



トナキトタテグモと
オキナワキムラグモの一種

6月17日

今日は、第二の沢をポイントにしてじっくりとやることにした。朝のうちはうす曇で風もあったので、ポイントにつくまでは比較的快適であった。昨日は下りてすぐのところまでキムラグモの採集に終始したが、今日は少し先まで歩いているいろいろなクモについても観察採集した。やはりこの沢にはやぶ蚊がほとんどいない。不思議だったが、水の流れがありその内外にはたくさんのイモリが歩いている。このイモリたちがカのぼうぶらを食べてしまうからだろうか。隣のカノ巣窟となっている沢は潤れ沢で、水は流れておらず、イモリ

もない。おかげで力対策を全くすることなく快適に観察することができた。大き目のキムラを探しているうちにトタテの巣があったので、とぶたをはずしてクモが出てくるかどうか試してみた。果たして数分するとクモは入り口まで出てきた。これからの課題は、クモを傷つけないように、かつすばやくクモの退路を断つ練習である。それができるようになれば掘る必要はなくなる。しかも、クモのほうから入り口まで出てきてくれるのであるから、植物の根や石に阻まれて採集できないということもなくなる。沢を少し進むとウズグモがたくさんいた。さてこのウズグモは渡名喜固有種だろうか？新種であったときのために、雌雄十分の数の標本を採集しておいた。リター上ではなにやら真っ黒なワシグモが採集できた。なんだろう？こればかりは顕微鏡で見ないといえなく見当もつかない。ふと気がつく、水の流れがあるのにアシナガグモ類が全くいない。オオシロカネグモは少数ながらいるのに、アシナガグモ類は全く見なかった。やはり面積の小さい島のせいなのかクモ相が貧弱なようだ。昨日はハブを警戒して石はぐりはやめておいたが、今日はハブに気をつけながら石をはぐり、オオハシリグモを探してみた。しかし、幼体すら見つからなかった。また、ナルコグモやヨリメグモも見つからなかった。少し下ったところで沢は険しくなっていたので大事をとってそこで引き返すことにした。沢筋にスズミグモがいるかと期待したのだが、全く見られなかったので、帰りには隣のやぶ蚊の沢に入り、もう一度チリイソウロウグモの搜索をした。この沢にはほんとうにたくさんのカがいる。スズミグモはけっこういるのだが、やはりいそうろうしているのはミナミノアカイソウロウグモとシロカネイソウロウグモだけで、チリイソウロウグモは全く見られなかった。昼過ぎからはよく晴れ上がり、日射がきつくなったので、帰り道はとても暑かった。風があったのでまだ耐えることができたが、この時期の日差しはとても強い。やはり雨の心配があっても雲の多い梅雨時期がいい。

夜は集落の周辺部でコガネグモダマシを狙った。コガネグモダマシは狙い通り採集できたが、そのほかにはたいした成果はなかった。やはり山のほうがおもしろいが、ポイントまでは1時間歩かなくてはならない。無理して事故を起こしては元も子もないので我慢することにした。



シロカネヒラタヒメグモ

6月18日

今日は島の西側を歩き、主に草地のクモを採集することにした。天気予報は曇りのち雨であったが、出かけたときにはまだよく晴れていてとても暑かった。海岸近くの草地で採集した。海の向こうには粟国島が見える。クモが少ない。久しぶりにみるシロカネヒラタヒメグモが少し不満をやわらげてくれた。そのほかにはたいした成果もなかった。弁当を

食べに展望台まで上がると、遠くにケラマ諸島が見える。帰り道には、湿地のクモを見ようとして島尻毛へよったが、初日に湿地を思った場所は、雨後にたまたま水が流れ込んでいたようで、今日改めてみてみるとただの草原であった。強い風のためか、高山帯のような草丈の低い植物が優占する草原で、湿地ではなかったので何の成果もなかった。遠くのほうで雷の音がしたのでそろそろ引き上げることにした。山を下り始めると黒い雲が迫り、ふと涼しい風が通り過ぎた。初日に雨にあったのと同じパターンだ。はたして数分後、強い雨が降り出した。さて、これで渡名喜の日程も終わりである。明日からは久米島だ。

県別クモ類分布図をバージョンアップしました

谷川 明男



県別クモ類分布図を Ver.2004 から Ver.2006 にバージョンアップしました。主な変更点は次のとおりです。1. Ver.2004 の分布データに 141 文献 8233 件のデータを追加し、データ件数は 48573 件になりました。2. 分布図の収録種数は、38 種増加して 1382 種になりました。3. 新たに 736 種 1529 枚の写真を追加しました。4. 県別種名一覧の表示を目録形式に変更しました。5. 新たに県別文献一覧の表示を追加しました。価格は前バージョンと同じく 1 枚 8140 円（送料とも）です。なお、Mac では、OSX 以降が必要です。ご購入く

ださるかたは私までご連絡ください。〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416 あ
るいは dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp 谷川明男。

入退会は：

事務局 初芝伸吾 186-0002 東京都国立市東 3-11-18-203 (有)エコシス
E-mail : hatsushiba-ecosys@h8.dion.ne.jp

通信原稿投稿先：

通信担当 谷川明男 247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷 1-4-2-1416
E-mail : dp7a-tnkw@j.asahi-net.or.jp

談話会通信次号の原稿締め切りは 2007 年 1 月末日です。ご投稿お待ちしております。

KISHIDAIA 原稿投稿先：

会誌担当 池田博明 258-0018 足柄上郡大井町金手 1099
E-mail : fwgd9084@mb.infoweb.ne.jp